



＜同志社人が母校を誇りに思える情報＞

「同志社ファン・レポート」  
Ver. 2-040 号（通巻 271 号）

「新島襄の青春」 -1-

同志社大学名誉教授 伊藤彌彦氏



久しぶりに、校祖・新島襄 です。

それも、新島襄の青春時代に焦点を当てたモノです。ご提供いただきましたのは、同志社大学名誉教授伊藤弥彦先生からです。先生をご存じない方のために略歴を掲載します。

伊藤彌彦（いとうやひこ）

1941（昭和 16）年、東京に生まれる。 国際基督教大学卒業，東京大学大学院修了。  
同志社大学名誉教授。日本政治思想史。

主な著書 『のびやかにかたる新島襄と明治の書生』（晃洋書房 1999 年）

『新島襄全集を読む』（晃洋書房，2002 年）『新島襄の手紙』（岩波文庫，2005 年）

『明治思想史の一断面―新島襄徳富蘆花そして蘇峰』（晃洋書房，2010 年）→最後にも

＜先生と新島襄＞

『なるほど新島襄』（萌書房，2012 年）「あとがき」でつぎのように書かれている。

新島襄との出会いについて一言すれば、大学院までの教育を東京で修了した私にとって、じつは新島襄に関する知識は乏しかった。ところが同志社大学法学部に就職し、しばらく経つと『新島襄全集』の刊行がはじまったのであった。全集をひもといてみると意外に新鮮で面白く、直感的に、同志社キャンパスに流通している新島イメージとは異なる等身大の人間としての新島襄を描けるのではないか、あるいはまた、幕末の日本を脱してアメリカ新大陸に飛び込んで十年も生活した人間、近代市民新島襄を語るべきではないか、と考えはしめた。同志社にはこんな切り口の新島論を受けとめてくれる寛大さがあったのは幸いであった。（後略）

＜等身大の新島襄＞を書かれることに、伊藤彌彦先生ファンが生まれています。

\* \* \*

強い意思と個性をもつ青年新島七五三太（襄の幼名）は、幕末社会で自己実現が出来ず苦しんでいた。それが玉島行きの快風丸に乗組む幸運を得て外の世界に触れ、遂には函館へ、そしてアメリカへと雄飛することになった。これはすでに語りつくされたテーマであるが、少し新視点で論じてみたい。まずは、「青年の旅とお金」の観点から函館紀行について考えてみる。

函館行については同時進行的に書き残したメモ、「江戸から函館へ」『新島襄自伝』（岩波文庫）がある。また『新島襄自伝』の冒頭には有名な「日本脱出の理由」が収録されている。こちらは、脱国の行動動機をハーディー宛てに書いたものである。しかし同じ旅程に触れながらこの二つの文章の色調はたいへん違う。どう解釈すればいいのだろうか、というのがこの連載の底にある私の問題意識である。

実は昨年春に学生相手にその話をしたので、講演体の文章を交えて以下に展開することをお許しいただきたい。

#### ◆海外旅行のこと

金坂清則『イザベラ・バードと日本の旅』（平凡社、2014年）の中には「旅行記を読むとは、その基になった旅を読み、旅する人を読み、旅した場所・地域を読み、旅した時代を読むことである」という言葉があります。

新島襄の旅行記を読もうとするためには、新島襄という人を読み、その旅を読み、旅した場所を読み、旅した時代を読むことをしなければなりません。海外旅行と言っても、今の学生諸君のイメージと私の1960年代のイメージと新島襄の場合とは全く違います。今や海外旅行は珍しいことではなくなりました。しかしこれはごく最近の現象なのです。今の日本ではお盆に家族で海外旅行とか、サーフィンをするためにハワイに行くとか、豊かな社会の恩恵を享受していますが、私の学生時代には想像できなかったことです。外国旅行の費用の重みが違います。

私は1961年に大学に入りました。高度経済成長の始まりかけた時で、その頃の「賃金構造基本統計調査」を調べてみますと、1961年のサラリーマンの平均月給が20,066円です。ボーナスが年平均2.7カ月でしたからサラリーマンの年収は月給に14.7を掛ければいい。つまり294,970円、サラリーマン一家の平均年収が30万円ありません。そういう時代です。年収50万円ある人は裕福な人々で、母子家庭で苦勞している母親が、せめて月1万円の収入があれば、と嘆いていたのを覚えています。

その年の早稲田の授業料が年間 54,000 円で、私の行った ICU（国際基督教大学）の授業料が年間 36,000 円でした。その頃月 500 ドルを仕送りしてもらっているアメリカ人交換留学生がいました。1 ドル 360 円の時代ですから、円に換算すると月 18 万円です。サラリーマンの平均が月 2 万円の時代に、そのアメリカ人学生は日本で王様の暮らしができる時代でした。逆に言えば、貧しい日本人の生活から見れば、映画でみるアメリカ市民の衣食住の豊かさには、羨ましくよだれが出たものです。そういう時代の海外は、とてつもなく輝いているものでした。

飛行機でアメリカに行こうとしたら 22 万円位かかりました。ということは、サラリーマンの月給の 11 カ月分ぐらい。そういう時代であります。横田基地からアメリカ軍の軍用飛行機にもぐり込んで行く、という話も聞きましたが、大体は船で行きました。当時のアメリカは、豊かな社会の見本でした。ですから 60 年代の大学生にとって欧米への海外旅行などは夢のまた夢でありました。

その頃ベストセラーになった旅行記が小田実の『何でも見てやろう』（河出書房新社 1961 年）です。これは傑作な本でありまして、フルブライト留学生になってハーバード大学に留学した後、1 枚の帰国用航空券と所持金 200 ドルで世界一周旅行に出かけ、一日 2 ドルの予算で一泊 1 ドルのユースホステルなどに宿泊しながら、ヨーロッパ、中東、アジアなどを回り、世界のあらゆる人たちと語りあった。その体験記が『何でも見てやろう』です。とにかく、止められない面白い本です。今でも新鮮ですから、諸君にもぜひ読んでほしいと思っています。

#### ◆新島青年、函館行のチャンスをもものにする

さて新島襄はどうであったかということになるわけです。海外渡航が禁止されていた時代ですから三つの難関が考えられます。まず脱国する時です。次に心配なのは船中生活、金のない難民状態だからです。目的地に着いて無事に上陸できるかどうかの心配がありません。この三つの難関が控えていました。

さて新島がアメリカに脱国する経緯は、二段ロケット方式だったと言えます。一段目が江戸から函館に行く期間、二段目が函館からアメリカまでです。

さて、一段目、函館への旅ですが、これがかなり「ハチャメチャ」な旅だった。入学式で読み上げられる「同志社大学設立の旨意」では「脱藩して函館に赴き」と言いますが、正確に言えば函館行きの時は、まだ脱藩はしておりません。ちゃんと安中藩の了承を得て出かけているのです。その頃の新島青年は、自分の人生に行き詰りを感じ、日々悶々としていました。

そんな不本意な青春時代に、備中松山藩が所有している洋船「快風丸」が、近日中に函館に行く、という魅力的な情報を友人から得ました。それで、七日後に出帆するという短期間に乗船工作を行い成功します。この乗船工作がとても面白いのですが、詳しい経緯については「新島襄の脱櫃」（拙書『明治思想史の一断面——新島襄・徳富蘆花そして蘇峰』）に書いておきましたので省略し、今回はこの航海における持参金の話をします。

#### ◆懐の金は一年分のはず

新島は藩から俸祿をもらっている身分でしたが、函館行きの時にさらに安中藩から十五両の修業料をもらっており、江戸から函館に行く時、懐には二十五両持って出ています。一両を6万円に換算すると現在の150万円にあたります。大学生諸君の中にも一年分の生活費を一度にもらって地方から来ている人がいると思いますが、新島も大金をもって江戸を出ました。ところが函館からベルリン号で密出国する頃、所持金が一両二分しか残っていなかった。当時の貨幣単位は四進法ですから、一両が四分、一分が四朱、つまり一両が十六朱の単位です。一両二分は9万円です。つまり150万円を9万円にまで減らしていた、94%の金をなくしてしまっていた、こういう事実があります。

3月7日に江戸から出発して、函館を6月14日の夜、脱国した、この間の3カ月でお金を使い込んでしまっている。今までこの金銭問題については誰も指摘していなかったと思うのですが、脱国を考えたときの裏事情として見過ごしてはならないのではないのでしょうか。皮肉な見方をすれば、これでは親にも藩にも会わせる顔がなく、外国に行くしかない、まさに「ハチャメチャの青春」であります。なぜこうなったか推測してみました。

#### ◆どこで金を失ったか

「江戸から函館まで」『新島襄自伝』岩波文庫、の91～92頁に、

四月十一日 快晴

予上陸し、伊勢屋清兵衛の家に宿す。予鋏ケ崎(くわがざき)の様子を見るに驚くべき事あり。如何(なん)となれば、

家毎に妓二、三人、或は四、五人あり。且つその総計三百人余に至る由。(要するに売春婦が300人くらいいるところだと)。これ商船の出入り多きに依るなり。当時〔現在〕、港内に碇せる商船、凡そ三十六、七艘なり。

この地の人物、陽は粗にして陰は獷狽なる事甚だし。これ悪(にく)むべき風俗…

とあり、「手控え」のここから後の部分、ページの四分の一ほどが鋭い刃物で切り取られています。誰かが新島襄の名誉を汚してはいけないと思って資料を改ざんしたと考えています。その部分には遊郭で散財したことを書いていたのではないかと考えています。

そしてこの港を出帆する日、四月十六日のメモには「この日、朝は快晴なりしが、離別の涙雨か、陰雨濛々として降り、転(うた)た離別の情をして切ならしむ」(『新島襄自伝』92頁)とあります。新島の文章としては珍しく、歌謡曲の歌詞のような「離別の涙雨」「離別の情」というしつぽりした感想がかかれてあります。

要するに世情にうとく大金を持っていた新島青年は、鯉ヶ崎で「港の怪物に奪取」(『新島襄全集 5』70頁)されたのでしょう。とにかく150万円のお金が3カ月後にはで9万円になっていたのです。ここから考えても、客観的な事情としては、アメリカにでも脱出するしか活路は開けないという立場にあった、という気もするわけであります。新島は最初から聖人のような、特別の人ではなかった、と思います。

### ◆その後の新島襄

なお新島襄の名誉のために付け加えておけば、函館行き途中で遊んだことを、後日、深く後悔反省し二度と間違いを犯さなかったことです。アメリカに着いて間もなくの弟双六殿への手紙には、「観音〔浅草観音〕の北に当たり八丁土手に続きたる一地〔吉原遊郭〕は、忠臣孝子の嫌うべき所にごぞ候間、決して彼の地へは徘徊せぬよう」(同志社編『新島襄の手紙』 岩波文庫 2005年 51頁)と書きます。

またフィリプス・アカデミー生徒の品行に比べて日本の書生を「我が朝放蕩の諸生、酒のみ自ら英雄とか称し、世間の人を見下げ豚犬とか呼び、親兄弟を蹴(け)付(つけ)け、情の知れぬ女郎になじみ、遂に靡毒(ようどく)(梅毒のこと)に染まり、・・・」と批判したあと、「少子も昔の七五三太と大いに違い、…」(同書46頁)と認めています。つまり新島青年は最初から石部金吉金兜のような無粋人、あるいは聖人君子だったわけではなく、失敗に学んだ後で強い自制心をもって自己を律する近代人に成長したのです。

さて、密出国のためのベルリン号に乗る際、身辺整理をして二両二分を得ました。それと持ち金を合わせて合計四両、一両を6万円とすると、24万円を持って乗船しました。このうちの一両一朱は乗船を手助けした福士卯之吉に借りていた金でしたから返そうとしますが、福士は断る。新島は武士の意地で返そうとする。結局、福士は一旦受け取ってからまた改めて新島に進呈して受け取らせています。福士は新島の恩人でもあるのです。ともかく四両を懐に日本を出国し、十年後に5千ドルの学校建設資金を持って帰国するのが新島襄であります。■

### ご著書・編著書

『日本近代教育史再考』(昭和堂, 1986年)

『維新と人心』(東京大学出版会, 1999年)

- 『のびやかにかたる新島襄と明治の書生』（晃洋書房 1999 年）
- 『新島襄全集を読む』（晃洋書房, 2002 年）
- 『新島襄の手紙』（岩波文庫, 2005 年）
- 『明治思想史の一断面—新島襄徳富蘆花そして蘇峰』（晃洋書房, 2010 年）
- 『新島襄教育宗教論集』（岩波文庫, 2010 年）
- 『未完成の維新革命—学校・社会・宗教—』（萌書房, 2011 年）
- 『自由な国の緘黙社会』（萌書房, 2012 年）
- 『なるほど新島襄』（萌書房, 2012 年）